

ハイエクの社会科学方法論

原谷 直樹(群馬県立女子大学)

1 はじめに

本報告はハイエクの社会科学方法論について、内在的検討を通じてその独自性を明らかにすることが目的である。とりわけハイエクの方法論的貢献と、いわゆる「ハイエクの転換問題」に着目し、そこでの議論にみられる方法論的錯綜を解き明かすことを目指す。そのうえで、個人主義／全体主義というダイコトミーをハイエクの方法論がどのように超克しうるのか、その可能性を提示したい。

2 ハイエクの方法論的貢献

オーストリア学派に共通する方法論的特徴として、主観主義、方法論的二元論、方法論的個人主義の三点が挙げられる。方法論的個人主義については次の「転換問題」において検討することにして、ここでは前二者へのハイエクの貢献、そしてミーゼスの方法論との関係を取り上げて検討する。

1) 主観主義への貢献

「経済学と知識」(1937)においてハイエクは、経済学において果たす人間の知識の役割について問い直し、これまでの経済理論の多くは市場における知識を与件としているため、同義反復的で実質的意味をもたないと批判している。このようなハイエクの知識への着目から、他の方法論的な議論と同様、社会主義経済計算論争の影響を読み取ることは容易である。ハイエクが市場社会主義の実現可能性を問うために経済計画の管理者が必要とする情報の質的・量的入手困難さを指摘したという理解は広く受け入れられている。しかし、個々の経済行為者の意志決定における知識や解釈の主観性の強調であれば、それはメンガーから一貫して受け継がれているオーストリア学派の伝統的な認識であり、それを他者(この場合は経済計画の立案・管理者)へ伝達する困難さは改めて指摘するほどの新しい知見ではない。知識の主観性は経済行為者の次元に止まらず、そうした条件のもとで営まれる経済活動を理論化し、説明しようと試みる経済学者というメタ次元にも及ぶという認識こそ、ハイエクのもたらした重要な貢献と捉えるべきだろう。

つまり、ハイエクが指摘した「不完全で分散した知識」という、社会科学が不可避免的に抱え込んだ条件は、方法論に対しても大きな制約として機能すると考えるべきである。すなわち、あらゆる人間は全ての知識を収集し活用するという超越的視点をとりえないという条件は、経済活動を行う行為者をそのような存在として記述することができないという理論要素の性質に対する制約や、理論をもとに

政策を立案・実行する主体に対してもそのような働きを期待することが不可能であるという、理論の活用に対する制約となるだけではない。くわえて、理論構築をする経済学者に対しても、その対象である経済現象やそのメカニズムへの理解に際して、すべてを完全に知りうる超越的存在にはなりえないという強い方法論的制約を課すことになるのである。

2) 方法論的二元論への貢献

『科学による反革命』(1952)においてハイエクは、科学主義、すなわち自然科学の方法をそのまま社会科学に当てはめようとする一元論的捉え方に対して激しい批判を加え、自然科学と社会科学の方法を峻別する、方法論的二元論の立場を明示的にとっている。しかしハイエクの二元論は、対象の異質性を客観的／主観的という古くからある二分法ではなく、単純性／複雑性の二分法に求める。データや変数の数という量的概念の蓄積によって対象の複雑性という質的な相違が生じるという考え方は、ハイエクの思想展開にとっても大変都合が良い。なぜならば、客観的／主観的という二分法では同列に扱うことができなかつた「生命・心・社会」といった諸領域をすべて、複雑な現象を扱う学問としてまとめることが可能になるからである。

また、対象の複雑性がもたらす方法論的含意もハイエクの思想の展開と親和性が高い。複雑な現象に対する説明は、その対象の性質からして「原理説明」にしかなりえず、将来に関する予測も厳密には成立せず、「パターン予測」に止まらざるをえないとハイエクは主張している。これは同じく方法論的個人主義を擁護しつつも、そこから合理主義的かつモデル構築的な方向へ進む主流派経済学から分かれて、個別具体的な条件設定をせずに社会進化論的な枠組みで社会のあり方を記述しようとするハイエクの社会理論を正当化しうる方法論になっているといえるだろう。

3) ミーゼスのアприオリズムとの関係

最後に、ハイエクの直接の師であるルートヴィヒ・ミーゼスの方法論との関係を確認しておきたい。ミーゼスの方法論を特徴づけるのが徹底したアприオリズム(先験主義)である。これは、経済理論はアприオリに真な少数の言明から演繹的に展開することで経験的に検証したり反証したりする必要のない理論体系を構築すべきであるという方法論的主張である。

通常、ミーゼスの過度な先験主義に対してハイエクは批判的であり、またミーゼスが拒絶した対象であるポパーの反証主義に表明しているシンパシーなどから、ハイエクの方法論的立場はミーゼスのものよりも穏健な、広義の経験主義に属すると理解されることが多い。

確かにハイエクは、知識や合理性の限定性といった現実的(すなわち、我々の経験的実感に合

致することを訴える) 想定と、ルールや規範の反合理主義的(狭い意味での演繹的論証に拘らない) 説明によって、そのロジックがより経験主義的であるとの印象を与えている。しかしこれは、あくまで発見の文脈における経験的妥当性であり、正当化の文脈においては、例えばルールの有用性については個人が合理的に判断することはできないといったような、ある種の不可知論に立ち、経験との照合を求めているようにみえる。もしハイエクが経験との一致の可能性を主張するだけで、正当化や棄却の基準を示さないのであれば、それは実質的な意味内容としてはミーゼスの先験主義とほとんど変わらないのではないだろうか。

3 ハイエクの「転換問題」

1) 「転換問題」と方法論的「転換」

ハイエクの生涯を通じた方法論的立場の変化について着目し、転換問題の嚆矢となったハチソンの論考(Hutchison 1981)では、ハイエクの方法論は、前期のミーゼス的アプリオリズム(ハイエク I)から後期のポパー的反証主義(ハイエク II)へ変化したと捉えられる。しかも、両者は異質な方法論的立場であり両立しえないはずであるとハチソンは主張し、ハイエク方法論の「Uターン」を指摘した。続いてヴァンバーグがハイエクの方法論的転換問題を取り上げ、前期と後期の違いを方法論的個人主義から方法論的全体主義への変化であると評価した(Vanberg 1986)。とりわけ、後期の社会進化論が、方法論的に全体主義となっているという指摘が重要だろう。こうした状況に対し、コールドウェルがいまや古典的論文となる「ハイエクの転換問題」(Caldwell 1988)を発表した。コールドウェルはハチソンが主張するほどには、ハイエクの議論に反証主義的性質は読み取れないと考えた。コールドウェルによれば、ハイエクにとって最も重要な転換点は「経済学と知識」であり、また転換をもたらした契機として社会主義経済計算論争の果たした役割は非常に大きい。

これらの議論を通じて、ハイエクの前期と後期で何らかの「転換」が起こっているという認識は共有されるようになったが、両者の関係性については共通理解が得られたとは言い難い。なかでも前期と後期の関係を矛盾していると捉える代表的な論者として、ホジソン(Hodgson 1993)やフリートウッド(Fleetwood 1995)、江頭進(江頭 1999)などが挙げられる。まずホジソンは、前期のハイエクにみられる方法論的個人主義へのこだわりが、進化論的なアイデアを導入する際に個体発生論的な論法に陥ってしまう原因であったと指摘している。一方、より後期の議論で全面化してくる文化的進化の集団選択という論法とは、進化論のアナロジーという点では共通していても、その進化論の内実が異なっており、両者が対立する理論内容である以上、相互矛盾に陥っていると批判した。つまりホジソンは、後期ハイエクの集団選択的な進化論的思考とそこで用いられる方法論的全体主義を高く評

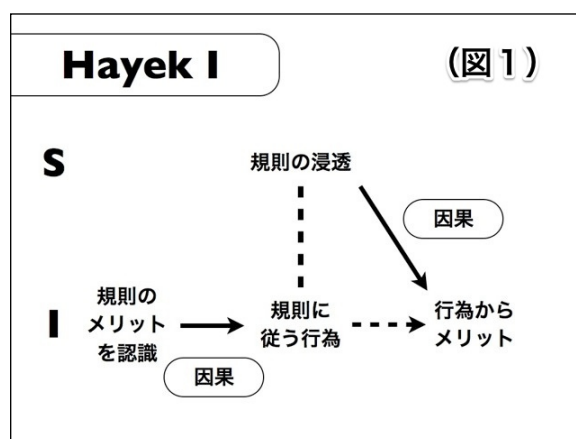
価し、それに対して前期のハイエクに見られる方法論的個人主義的思考は誤りであると同時に後期ハイエクと矛盾していると考えたのだ。

フリートウッドの場合はハイエクの転換を三段階に捉えている点、そしてロイ・バスカーとトニー・ローソンの批判的実在論の立場から評価している点がホジソンとは異なっている。しかしながら、ハイエクにおける前期から後期への変化と両者の齟齬という認識、そして後期を評価し前期を批判するという基本的スタンスについてはフリートウッドもホジソンと同様である。江頭もハイエク思想の詳細な読解を通じてハイエクの方法論的転換の契機をより初期段階に見出す点にオリジナリティがあるが、ハイエクの転換そのものへの評価はホジソンらに沿っているといっていよう。

2) 方法論的「転換」で変化したものはなにか？

はたして、ハイエクの転換は方法論的にどのような違いをもたらしているのだろうか。前期ハイエク (Hayek I) に代表的な主張は、規則に従った振る舞いは相互期待の合致する可能性を高めるため、各個人は規則に従って行動し、そこからメリットを得る、というものだと考えられる。つまり、集合的＝社会的概念を実在する概念として捉えるのではなく、あくまで個人的な概念から説明を構築することで、われわれが集合的な概念間の関係として理解しがちな現象に対して正しい説明を提示することこそ、社会科学の望ましい方法論的なあり方であるとハイエクは考えている。

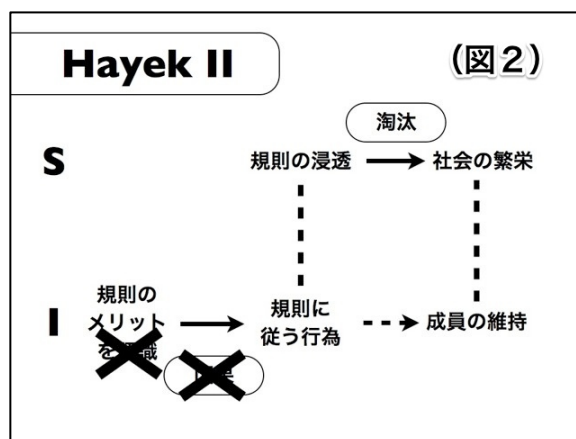
それでは、概念のレベルを個人のレベル (I) と社会のレベル (S) とに分けたうえで Hayek I を図示してみよう (図 1)。すると、Hayek I では二つの因果的説明が提供されていることがわかる。すなわち、第一に個人のレベルにおいて、諸個人がその規則のメリットを認識することが、規則に従う行為という結果を生み出すという説明がある。第二に、諸個人が規則に従って行動するという個人レベルの現象が、社会的にはそのような規則が浸透しているという集合的狀態を同時に引き起こしているが、実はこの他者もまた同様の規則に従っているということから、相互期待の合致というメリットを個人レ



ベルで引き起こしているという説明である。第二の説明においては一見すると社会的な概念による説明がなされているように思えるが、その背景には個人レベルのメカニズムが想定されていることが重要な点である。

続いて、後期ハイエク(Hayek II)の代表的な主張をみてみよう。これは、各個人が規則の意義を知らずとも、有益な規則が浸透した社会はそうでない社会に比べて繁栄する、というものと考えてよいだろう。確かにこの時期にみられる「全体的秩序」や「成員の生存」、「進化論的選択」といった用語法は Hayek I では見られなかったものである。それでは Hayek I と同様に、個人と社会のレベルを区別して、この Hayek II を図示してみよう(図 2)。

Hayek I とは異なり、規則のメリットの認識から規則に従う行為を導出する個人レベルの説明はここでは提示されていない。また、規則の浸透がもたらす帰結については、あくまで進化論的な集団選択を通じた淘汰の結果として社会の繁栄を説明するという、社会的次元における説明になっていると考えられる。この点をみれば、多くの論者が指摘したように、Hayek II では方法論的個人主義が放棄され、方法論的全体主義が採用されている



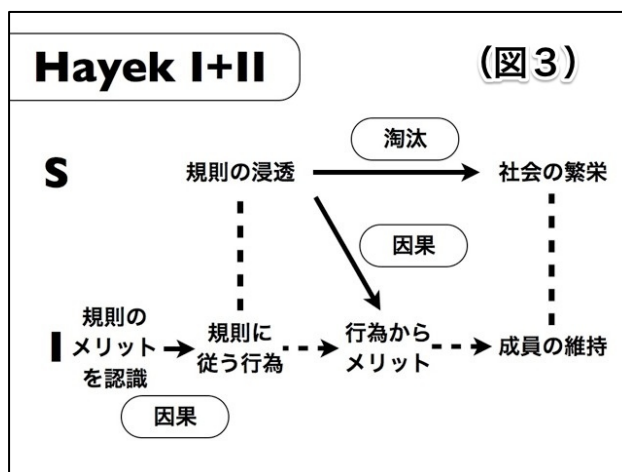
ということになるだろう。その意味で、Hayek I と Hayek II の間に少なくとも方法論的「変化」があったということは否定できない。しかし問題は、この変化が「転換」であり矛盾として捉えられるべきなのかということである。

3) 「転換」の方法論的意味

方法論に関する論争が自己の正当化と相互批判という狭隘な議論になりがちなため誤解されることが多いが、そもそも一つの学問領域、一つの理論体系、一つの説明対象に対して単一の方法論が採られなければならないという理由は存在しない。これは多様な方法論が並立的に存在したほうが科学的実践がよりよく進行するという、いわゆる「方法論的多元主義」の主張ではない。そうではなくて、方法論をツールとして捉えたときに、個別の目的に対して単一の手段のみが有効でその他の手段全てがまったく意味をなさないというケースはほとんど存在せず、また現実的に採りうる選択肢の有効性の評価も一意に定まるわけではないという経験的な主張である。したがって、同じ対象に対して複数の説明をもたらすことすら、それ自体としては論理的には矛盾ではなく、異なる対象にそれぞれ異なる方法論を採用して説明を試みることなどは方法論的にまったく問題がないといえるだろう。このように考えたとき、前期と後期のハイエクははたして方法論的に矛盾しているのだろうか。

再度、Hayek I と Hayek II の違いに着目してみよう(図 1、図 2)。それぞれの説明が方法論的に異なる次元で展開されていることは先に確認したとおりである。しかし、両者はそもそも説明しようとする

る対象が異なるのではないだろうか。二つの説明で想定されているプロセスを結合して図示してみよう(図3)。このとき、Hayek IとHayek IIとで、同じ対象に対して複数の異なる説明をもたらしている部分がないことに注意したい。確かに、Hayek Iの前半部分における個人レベルの因果的説明はHayek IIでは示されていない。しかし、これはルールの進化論的な選択を説明するという目的に対して不要であると省かれています。ここにHayek Iの説明を接合したとしてもHayek IIが成立しなくなるわけではない。



次にHayek IIの主要部分を見てみよう。集団における規則の浸透が社会の繁栄をもたらすという説明は確かに集合主義的な説明である。しかし、その背後に想定されるHayek Iのプロセスを考慮に入れるならば、これは同じ対象に対して複数の異なる説明を提示していることにはなるが、それらが相反する説明になっているわけではないことがわかるだろう。とりわけ、社会的次元における説明が因果的な説明ではなく、あくまで進化論的な淘汰に基づいた機能的説明であることが重要である。これによって、ハイエクが集合的概念自体に因果的パワーを付与しているのではなく、あくまで個人的要素から構成しうるプロセスにオーバーラップさせるかたちで、社会的次元における説明を描いていると捉えることが可能になるのである。

主要参考文献リスト

- 江頭進『F.A.ハイエクの研究』日本経済評論社、1999年。
 桂木隆夫編『ハイエクを読む』ナカニシヤ出版、2014年。
 Caldwell, B. 1988 “Hayek’s transformation”, *History of Political Economy* 20(4).
 Fleetwood, S. 1995 *Hayek’s Political Economy: The Socio-economics of Order*, Routledge. 佐々木憲介・西部忠・原伸子訳『ハイエクのポリティカル・エコノミー』法政大学出版局、2006年。
 Hayek, F. A. 1937 “Economics and Knowledge”, *Economica* N.S. 4. Reprinted in Hayek, 1948.
 Hayek, F. A. 1948 *Individualism and Economic Order*. London: George Routledge & Sons. 嘉治元郎・嘉治佐代訳『個人主義と経済秩序』春秋社、1997年。
 Hayek, F. A. 1952 *The Counter-Revolution of Science: Studies on the Abuse of Reason*. 2nd edition, Indianapolis: Liberty Fund. 渡辺幹雄訳『科学による反革命』春秋社、2011年。
 Hodgson, G. M. 1993 *Economics and Evolution: Bringing Life Back into Economics*, Blackwell. 西部忠監訳『進化と経済学』東洋経済新報社、2003年。
 Hutchison, T. W. 1981 *The Politics and Philosophy of Economics: Marxians, Keynesians and Austrians*, Blackwell.
 Vanberg, V. J. 1986 “Spontaneous Market Order and Social Rules: A Critical Examination of F. A. Hayek’s Theory of Cultural Evolution”, *Economics and Philosophy* 2(1).